



二十部中 第七號

十二月四日 第二部

昭和六年 情勢判斷 同 謝 策
秋末ニ於ケル

今回滿洲事變ニ際會スルヤ當初ニ於ケル關東軍ノ適切且ツ果敢ナル行動ニ依リ一舉奉天、吉林兩省ノ大半ヲ收メ次イテ馬占山軍ノ嚙撃ニ因リ黑龍江省ヲシテ帝國ノ威令ニ服セシムルニ至リシモ日支兩國ハ依然交戰狀態ニ在ラス且此間他方ニ於テハ國際政局ノ推移ニ深甚ナル考慮ヲ拂フノ要アリシヲ以テ一舉ニ滿洲問題ノ根本的解決ニ向ヒテ奮進スルコトヲ許サズ外面的ニハ滿洲ニ獨立新政權ヲ樹立スルヲ以テ目標トシ表面事態ノ擴大ヲ避ケツツ對外諸般ノ政策ヲ實施スルノ已ムヲ得サルニ至リ以テ今日ニ及ヘリ

今ヤ帝國ハ北滿ノ一角ニ於テ蘇國ノ權益ト觸接シ錦州方面ニ於テハ直接眼學良系ノ軍隊ト相對峙シテ全世界ノ視線ヲ此處ニ集ム 其他北支ノ形勢ハ學良死活ノ運命ヲ目前ニ控ヘテ益々險惡ナラントシ中支地方亦聯盟理事會ノ態度ト相持テ内外ニ重要ナル局面變化ヲ展開セントス 茲ニ於テ廣ク大局ヲ顧ミ既定情勢判斷ヲ補フテ現狀ヲ透視シ之ニ應スル對策ヲ案スルハ曠ク刻下ノ重要務タルヲ認メスンハアラス以下先ツ列國ノ對時局態度ヲ吟味

シ次テ我本然ノ使命ニ照シ爾義總營等ニ問スル準繩ヲ述フルコト左ノ如シ
支那

支那ノ對日態度ハ國際聯盟ノ形勢如何ニ存ス聯盟ニ入ル判斷別項ノ如ク
今遽カニ逆睹スヘカラサルモノアルモ特異ノ情勢突發シサル限り聯盟ノ形
勢ハ必シモ支那ノ満足スル解決ヲ見ルニ至ラサルヘク此ノ場合現南京政府
(學良ヲ含ム)ハ自暴自棄的態度ニ出ツルカ或ハ瓦解ノ因ヲ爲スヘク然ラ
スハ現政府、或ハ之レニ代ルヘキ政權トノ間ニ日支直接交渉ニ入り此間
何等カノ妥協條件ヲ提出シ局面ノ打開ヲ圖ルヘント判斷セララル

若シ夫レ南京政府ト學良カ失脚ヲ欲セス自暴自棄的態度トナリ武力行使ニ
出ツルカ如キハ帝國ノ最モ希望スル處ニシテ之カ對抗ノ準備アル今日何等
憂フルニ足ラス然レトモ支那ノ情勢ハ寧ロ南京政權ノ混亂ト共ニ軍閥致
客ノ利己的鬭争、共產黨ノ跳梁、閩派ノ争ヒ等ニ因リ或ハ聯盟、長
髮賊類似ノ排外的動亂ヲ招來スルノ顧慮多キモノト觀察セラル而シテ後者
ノ如キ事態ニ至ランカ列強ノ間ニハ支那ノ協同管理乃至分割論ノ抬頭ヲ見
ルニ至ルノ虞アルヲ以テ帝國ハ豫メ之カ對策ヲ決定シ置クコト緊要ナリ

直接交渉ニ入ル場合詭辯ヲ弄シ巧言令色ニ長セル支那政客要人ハ最後迄強
硬ヲ裝ヒ此間裏面的ニ種々ノ策動ヲ行フノ常ナルヲ以テ帝國ハ飽ク迄
滿蒙新政權ヲ中央政府ヨリ分藩シ滿蒙諸懸案ノ解決ハ之ヲ地方問題ニ移ス

一方中央政府ニ對シテハ單ニ排他的諸運動ノ根絶ヲ誓約セシメ且確定的保障ヲ掌握セサル限り一步モ譲ラサルノ態度ニ出ツルヲ要ス但徒ラニ優越感ニ走り爾他附帶的諸條件ヲ附加スルカ如キハ此際嚴ニ慎マサル可カラス

若シ國際聯盟ノ形勢支那ニ有利ニ轉向スル場合ニ在リテハ彼ハ依然排日排貨ヲ續行シ日本ニ撤兵ヲ迫リ根本ヨリ對支日本權益ヲ蠲逐スルヲ策スルニ至ルヘシ此場合ハ即チ日支兩國ノ對立狀態ヲ醸スモノニシテ帝國ハ對支貿易ノ杜絶ニ因リ不利ヲ招クコト固ヨリナルモ支那側亦關稅收入ノ減少ヲ來スノミナラス物資ノ不足ヲ伴ヒ物價ノ騰貴スルヲ免レス而モ帝國ハ假令列強ノ壓迫ヲ受クルト雖モ滿蒙ノ經營ニ依リ國家經濟ヲ發展セシメ得ルニ反シ支那政府ハ何等得ル所ナキヲ以テ其受クル苦痛ハ帝國ノ夫ニ比スヘクモ非ス故ニ帝國ハ夙ニ持久ノ策ヲ講シ國民ノ結束ニ一層ノ力ヲ拂フト共ニ進シテ謀略ヲ用ヒ事態ヲ日支戰爭ニ進展セシムルノ覺悟ト準備トヲ必要トスヘシ

支那ニ關スル對策細綱ヲ關シテハ別ニ之ヲ述フ

米 國

帝國カ滿蒙經路ノ歩ヲ進ムル場合最モ考慮ヲ要スルハ前情勢判斷ニ於テ既ニ述ヘアル如ク米國ノ態度ナリ

今回事變ニ對スル米國ノ態度ヲ見ルニ豫想以上冷靜ナルモノアリテ表面的

ク迄責任ノ地位ニ立ツコトナク終始聯盟ヲ表面ニ活動セシメ自己ハ發言ノ

機會ト行動ノ自由トヲ保有シツツ而モ不戰條約又ハ九ヶ國條約ノ適用ニ關

シテハ深甚ノ注意ヲ怠ラサル態度ニ在ルハ大ニ注目ヲ要スル點ナリ

抑々米國ヲシテ斯ノ如キ態度ニ出テシメタル原因ニ就キテハ近時極東ニ對

スル彼ノ認識向上セラレタルニ因ルヘキモ特ニ明年ハ總選舉ヲ控ヘ米國ト

利害關係比較的薄キ滿洲事變ニ干與シ往年蘇支紛争ニ干渉シ失敗シタルカ

如キ醜態ヲ再ヒ繰返ササル深キ用意ニ出テアルカ故ナリ其他假令滿蒙ヨリ

日本ノ勢力ヲ驅逐スルモ之カ代償トシテ赤蘇ノ勢力ヲ誘致スルハ米國トシ

テ得失相償ハサルヲ了知シアルコト並ニ世界的不景氣ノ影響意外ニ甚大ニ

シテ産業貿易ノ維持振興上平和ノ繼續ハ彼ノ希望シアル所ナルコト亦之カ

原因タリ、從ツテ帝國ニシテ能ク支那ノ實狀ト其不信不法行為ヲ正解セシ

ムルト共ニ帝國カ其人口問題ノ根本的解決ノ爲メニハ滿蒙既得權益ノ確保
 ハ民族ノ死活問題ニシテ之カ正當ナル解決ハ將來國際平和ニ貢獻スル所最
 モ大ナル所以ヲ卒直ニ闡明理解セシムルニ努力スルニ於テハ米國ハ帝國カ
 現在自途トシアル滿蒙經營ニ對シ武力干渉ヲ試ミルカ知キコト萬無カルヘ
 シト判断ス
 然レトモ米國ノ主唱ニ依リ成立シタル不戰條約ニ於テハ自衛權ノ發動ニ基
 ク兵力ノ行使ハ固ヨリ妨ケサルモ國家政策ノ手段トシテ戰爭ヲ放棄スルコ
 トヲ嚴肅ニ宣言シ條約國ハ相互間ニ起ルコトアルヘキ一切ノ紛争又ハ紛争
 ハ其性質又ハ起因ノ如何ヲ問ハズ平和的手段ニ依ル外之カ處理又ハ解決ヲ
 求メサルコトヲ約シアルヲ以テ帝國ノ行動ニシテ苟クモ自衛權發動ノ領域
 ヲ超ユルニ於テハ米國亦彼ノ面目上默通セサルヘキヲ豫期シ置カサルヘカ
 テス
 又々九ヶ國條約ハ支那ノ主權、獨立並其領土の保全ヲ嚴重シ支那カ自ラ有
 力且安固ナル政府ヲ確立維持スル爲メ最完全ニシテ且ツ最障ナキ機會ヲ
 之ニ供與スルト共ニ門戶開放、機會均等ノ主義ヲ確立スルモノアリ推ツテ

満蒙新政権ノ樹立ハ表面支那自體ノ分裂作用ノ結果ナリト認メ得ルトスル
 モ帝國カ既得權益ヲ更ニ擴張シ成ハ獨占的態度ニ出ツルカ如キハ明ニ本條
 約ノ趣旨ニ抵觸スルモノナルヲ以テ帝國ノ滿蒙經營ニシテ實質的ニ伸張ス
 ルニ至ルヤ米國ノ態度ニ急變ヲ見ルヤ測ルヘカヲサレバナリ
 然レトモ幸ニ米國ノ武力ハ勿論彼ノ最モ採ルヘキ公算アリ且ツ最モ我カ苦
 痛トスル經濟封鎖ニ對シテモ帝國カ深ク之レヲ惧ルルノ要ナキハ前情勢判
 斷ニ於テ之ヲ述ヘアルカ如シ但シ米國ニ對シ殊更挑戰的態度ヲ示シ彼ヲ敵
 トスルコトハ大局上無益ノ行爲ナルヲ以テ帝國ハ暫ク名ヲ捨テ實ヲ採ルノ
 方針ヲ持シ支那本部ノミナラス滿蒙ニ於テモ我經營上ノ根本方針ヲ傷ハサ
 ル限リ門戶開放機會均等ノ趣旨ヲ以テ臨ミ獨立新政権ノ樹立ハ統合等ニ方
 リテモ努メテ自然的推移ヲ進ラシメ以テ彼ニ口實ヲ與ヘサル如クシ將來好
 機ヲ待テ滿蒙獨立國家ヲ創設スル等漸進的態度ニ出ツルヲ滿蒙經營上適當
 ナリト認ム

今回聯盟ノ背後ニ在リテ之ヲ操縦シタルモノヲ英國トナシ在支列國使臣中

反目的策謀ニ活躍シタルモノ亦英國官憲トナス然レトモ幕國ヲ目シテ直ニ

彼ノ極東ニ對スル認識不足トナスハ當ラズ、英國ハ過去一世紀以上ニ亙リ

支那ト密接ナル交渉ヲ有シ現ニ尙ホ牢固タル地步ヲ中南支方面ニ占メ支那

ニ對スル認識並ニ之カ對策ノ徹底ニ關シテハ寧ロ弱國ニ比シテ強國ニ長ク

リト謂ハサル可カラス、然レトモ幕國ハ近年帝國ノ東亞ニ於ケル急激ニ發展スル依リ彼カ既

存勢力ノ侵害セラレアルヲ憂ヒ偶々今回事變ニ際會スル覺感ヲ支那ト賣

漁夫ノ利ヲ收メ以テ彼カ地步ノ安固ヲ冀ハントスルニ在リシハ外ニ支那

然レトモ英國ハ日本ト密接ナル協調ヲ遂クルニ依リ殆ク彼ノ東亞方面ニ

體ニ於ケル既存勢力ノ安固ヲ得ルモノニシテ英國國民亦漸ク之ヲ了知セルカ

如ク今ヤ一般ノ輿論ハ逐次我ニ同情ヲ表スルニ至リ、幕國ハ

一ノ帝國亦國策經營ノ重心ヲ滿蒙ニ傾注スル以上滿蒙問題ニ關シテハ斷乎

タル決意ヲ示スル要ムルト共ニ其他ノ方面ニ於テハ努力ヲ排他的態度ヲ顯

ケ寧口英國ト提携シテ事ヲ進ムル態度ヲ示スヲ以テ大局上有利トスヘシ

正しく、英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

英米の提携は、東洋の平和と繁栄に資するものであり、日本は、英米の提携を歓迎し、その利益を享受するに努むべきである。

國際聯盟

國際聯盟ハ理事會席上並帝國屢次ノ聲明ニ於ケル公明且ツ強硬ナル主張ニ依リ著シク滿蒙ノ實質ニ對シ其認識ヲ高ムルニ至レリ

美佛兩國内ノ輿論亦逐次帝國ノ立場ヲ正解シ從來理事會ノ態度カ現實ノ情勢ニ即セス徒ラニ高壓的的態度ニ出テタルハ却ツテ平和的解決ニ資スル所以ニ非サルコトヲ唱道スルニ至レリ是ヲ以テ將來帝國ノ行動ニシテ著シク聯盟諸國ヲ刺戟セサルニ於テハ形勢ハ逐次帝國ニ有利ニ展開スヘキモ而我根本的主張ヲ悉ク是認セシムルニ至ル迄ニハ尙相當ノ迂余曲折ヲ經ルモノト見サル可ラス

一面聯盟ノ態度ハ終始米國ノ鼻息ヲ窺フノ風アルヲ以テ米國ノ輿論ニシテ今日ノ如ク經濟斷交ノ如キ制裁的行爲ニ出ツルヲ適當トセサルニ傾キツツアルニ於テハ聯盟モ亦タ斷乎タル決意ニ出ツルコトナキモノト判斷ス然レトモ將來米國ニシテ或ハ不戰條約又ハ九ヶ國條約ノ條項ヲ援用シ其對日態度ヲ硬化スルニ至ランカ聯盟モ亦之ニ追隨シテ其態度ニ變調ヲ來スヘキハ豫メ之ヲ豫測シ置カサル可カラス若シ夫レ帝國トシテ其最惡ナル場合

320

0856

ヲ豫想シ萬一聯盟規約第十六條ニ據ル經濟斷交ヲ適用セラルトスルモ聯盟主要國間ニ於ケル利害必スシモ一致シテラサル現況ニ於テ彼等カ殆ント關心ヲ有セサル極東問題ニ關聯シ果シテ渾然一致ノ行動ニ出テ得ヘキヤ將タ又々英佛協同ノ力ヲ以テスルモ實質的ニ幾何ノ效果ヲ收メ得ルヤ多大ノ疑問ナキ能ハス而モ帝國トシテ牢固不拔ノ決意ヲ有シ内國民奮起節制シ外支那資源ノ宜シキヲ制シ得ルニ於テハ萬一米國ニシテ亦聯盟側ニ立ツ場合ニ在リテモ經濟斷交ノ如キ敢テ惧ルルノ要ナキコト既ニ當部調査ノ結果ニ依ルモ明カニシテ或ハ之ニ依リ却ツテ帝國產業上轉禍爲福ノ契機ヲ招徠スルヤモ圖リ難シ

今同滿洲事變ノ善後措置トシテ帝國カ直接支那ト交渉セント欲スルモノハ支那ヲシテ國交又ハ國民ノ感情乃至利益ヲ害フカ如キ排他的言動ノ根絶既存條約ノ尊重ヲ實行セシメ且帝國カ必然的運命トシテ處理スルヲ要スル人口問題ノ解決ヲ滿蒙ノ地ニ求メントスルニ在リ、又撤兵ノ先決條件トシテ求ムル所ハ治安ノ維持ニ存シ其公明妥當ナル何等他ノ干涉ヲ俟タサル所ノモノナリ然ルニ若シ夫レ目前ノ小康ニ提ハレ一步タリトモ我主張ヲ聯

22

盟ノ前ニ屈スル所アランカ番ニ支那ヲシテ聯盟ニ對スル依頼心ト帝國ニ對
 スル侮慢心トヲ増長セシメ却ツテ時局拾收ヲ困難ナラシムルノミナラス帝
 國ハ自ラ正義ヲ冒瀆シ國民ノ衿持ヲ傷タルモノニシテ畢ニ道義上復タ立ツ
 コト能ハサル汚辱ヲ蒙ルニ至ルヘク須ク内外ニ對シ確乎不拔ノ覺悟ナカル
 可ラサルモノナリ

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

蘇國

ソ連

蘇國ハ獨ニ馬占山軍ニ對シ私カニ各種援助ヲ與ヘタリシカ如キ報道アリシ
 モ彼ハ目下國力充實ノ途上ニ在リテ其産業五年計畫ノ效果顯ハルルニ至ル
 迄ニハ尙ホ相當ノ時日ヲ俟タサルヘカラス而シテ彼カ極東ニ於ケル諸施設
 及事變發生後ニ於ケル極東軍ノ動靜並今回我軍齊々哈爾ニ進入セル際ニ於
 ケル彼ノ態度ニ徴スルモ帝國ニシテ進シテ挑戰的態度ニ出テサル限り彼ヨ
 リ進シテ日支紛争ノ渦中ニ投スルノ意志ハ之ナキモノト判斷セラルル而シテ
 帝國トシテモ國際政局ノ趨向ホ鑑ミレハ對外政策上蘇國利用ノ余地ヲ存シ
 置クヲ有利トスヘク將々又々國策經營ノ重點ヲ滿蒙問題解決ニ傾注スル
 ニ際シテ事態ヲ滿蒙以外ノ地ニ擴大スルハ目下ノ情勢ニ於テ適當ト認メ難
 キヲ以テ帝國カ北滿ヲ經營スルニ方リテハ暫ク彼ノ權益ヲ尊重スルノ態度
 ニ出ツルヲ有利トス

0859

國內

國內ノ輿論ハ我陸軍ノ努力ニ因リ本春以後逐次好轉ヲ示シツツアリシカ
事變勃發ト共ニ頓ニ高潮シ國民的意氣近來稀ニ見ルノ緊張ヲ示スト共ニ軍
部ニ對スル信頼亦絶大ナルモノアルニ至レリ此ヲ以テ軍部ハ内益ト部内ノ
結束ヲ固ウシテ政府及國民ヲ鞭撻指導スルト共ニ外今後幾多ノ難關ニ遭遇
スルモ苟クモ一喜一憂其所信ヲ變スルコトナク斷乎トシテ當初ノ目的貫徹
ニ努力スルヲ要ス

然レトモ國民輿論ノ底流ニハ今尙ホ軟論存在スルモノアルノミナラス政府
亦必シモ軍部ノ意志ト合流シアルモノニ非ス左傾分子ノ潛行的策謀亦大ニ
警視ヲ要スルモノアリ今ヤ事變勃發以來既ニ二ヶ月半ヲ閱シ向後事態ノ變
趨邊ニ逆睹スヘカラス況ンヤ事件ノ落着ヲ見ルハ果シテ何レノ時期ナリヤ
何人モ豫測シ難キ情況ニ在リ

此間中南支方面ニ於テハ依然通商交易ノ杜絶ヲ見ルヘキモ他方滿蒙ニ於テ
ハ其經營着々進展スルニ伴ヒ帝國ノ權益著シク伸展ヲ見ルヘク我產業經濟
上ニ大變調ヲ來スニ至ルヘシ然ルニ現ニ中支方面ニ居留シ若クハ之レト利
害ヲ有スル國民ノ一部ニ於テハ早くモ此ノ苦惱ニ堪ヘス軍部ヲ呪咀シ或ハ
政府ニ頼リテ帝國態度ノ軟化ヲ策スルカ如キ者絶無ト稱ス可ラス此等ニ對

924

シテハ先ツ救済ニ關シ所要ノ手段ヲ講スルト共ニ一方之カ監視ヲ怠ラサル
ヲ要ス然カモ苟クモ國民ノ一部就中重要ノ地位ヲ占ムル分子ニシテ依然自
覺ナキ行動ニ出ツルニ於テハ軍部ハ國家永遠ノ爲ニ圖リ所要ノ場合自ラ主
動ノ位置ニ立チテ國家誕生ノ一途ニ邁進スルノ覺悟ト準備トヲ必要トスベ
シ

結言

以上内外ノ情勢ヲ綜合判斷スルニ帝國ト利害最モ緊密ナル蘇國ハ目下國力充
實ノ途上ニアリテ未タ其威力ヲ國外ニ用ヒ難ク米國亦國內的事情ニ依リ事態
ノ擴大ヲ喜ハス英國ニ至リテハ單ニ既存勢力ノ維持ニ汲々トシテ殆ント他
ヲ顧ルコト能ハサルノ状態ニ在リ加之國內ノ輿論亦異常ノ緊張ヲ示シソツ
アルヲ以テ現時ハ實ニ帝國カ滿蒙ノ經營ヲ歩ヲ進ムニ絶好ノ機會ナリト
云フヘシ

而シテ滿蒙經營ノ根本ニ關シテ尙前情勢判斷於テ述ヘアル如ク積極的
テ領土的解決ヲ必要トスルモ曩ニ九ヶ國條約ヲ締結シ最近再ヒ支那領土保
全ノ尊重ヲ聲明セル帝國トシテ此際一國獨立國家ノ建設ヲ指導スルカ如キ
ハ其手段如何ニ巧妙ナリトスルモ帝國ノ正義ヲ傷ケ國際的立場ヲ不必要
不不ナラシムルノ嫌アリ、又斯ノ如キ急激ナル措置ハ滿蒙各新政權ノ乖離

ヲ招キ結局目的の達成ニ急ナラント欲シテ却ツテ效ヲ收ムルコト雖キニ至ル
ヲ保シ難シ故ニ現時ハ前情勢判断對策第三階段ノ目的トスル獨立國家建設
ノ前提トシテ暫ク獨立新政樹立ヲ目標トシ漸ク以テ事ヲ進ムルノ已ムツ
得サル狀勢ニアリト認ム

然ルニ滿蒙ノ現況ハ未ク帝國ノ期待ニ達セズ前途幾多ノ難關ヲ打破シ局面
ノ轉換ヲ圖ラサル限り如上ノ目的ヲモ達成シ得サルノ實情ニ在リ故ニ帝國
ハ今ヤ軍事行動ノ大部ヲ了セリト雖更ニ殘存勢力ノ掃蕩ニ努メテ一貫ノ功
ヲ成カサルト共ニ愈々建設的行程ニ入り以テ確固不拔ノ根底ヲ築クヲ要ス
他面平津就中長江南支方面ハ事變勃發以來之カ余波ヲ受ケ從來嘗ツテ見サ
ル徹底的排日排貨ヲ蒙リ其影響深刻ニシテ且其根底相當深キモノアルヲ以
テ假令同方面ニ於テ將來政權ノ移動更迭ヲ見ルモ相當長期間ニ亘ルモノト
判断セラル固ヨリ帝國ハ之レカ對策ニ努メサルヘカラサルモ而モ國家百年
ノ大計ニ鑑ミ該方面ノ苦痛ハ暫ク之ヲ忍ヒ國策經營ノ重點ヲ滿蒙問題ノ解
決ニ傾注スルコト絕對ニ必要ナリト認ム

0862

支那ニ關スル對策細綱

情勢判斷ニ基ク對策ノ主要ナルモノハ速ニ滿蒙新政權ヲ確立スルニ存スル
コト勿論ナルモ之レト同時ニ支那本部ニ對シテハ張學良及現國民黨政權ヲ
覆滅シ且之ニ依テ支那ヲ一時混亂ニ導キ世界ノ觀聽ヲ滿蒙ヨリ遠サケ且爲
シ得レハ支那ニ數個ノ政權ヲ樹立セシメ南方ヨリ北方ニ至ルニ從ヒ日本色
ヲ濃厚トナシ滿蒙ニ至リテハ終ニ殆ント帝國色タラシムル如クスルヲ以テ
我根本方策トナス

一 滿蒙新政權確立ニ關スル措置

滿蒙ハ之ヲ支那領土ノ一部ト見做スモ中央政府ノ統制ニ服セサル事實上ノ
政府ノ勢力範圍タラシム之レカ爲左ノ對策ヲ採ルヲ要ス

一 各省政權ノ迅速ナル確立安定ヲ幫助ス之カ爲更ニ一段積極的ニ之カ援助
ニ努ム

成立セル各省政權ハ逐次聯省統合シテ其安固ヲ増進セシメ機ヲ見テ新統
一政權ノ樹立ヲ宣言セシム

一 滿蒙ニ於テ帝國ノ保有スル權益ノ回收及擴充ハ新統一政權ヲ對象トシテ
之ヲ行フヲ本旨トス然レトモ該政權樹立前ニ於テモ各省政權ヲ對象トシ

0863

テ着々實效ヲ收ムルヲ要ス

三 新政權諸般ノ經營ハ在滿蒙諸民族ノ共存共榮ヲ圖ルヲ主眼トス

四 滿蒙各政權ノ兵備ヲ左ノ主旨ニ依リ建設セシム

(1) 各省政權ノ成立ニ伴ヒ當該省内ノ治安維持ハ各其省防軍及保甲團ヲ以テ擔任セシム

但シ商埠地其他必要ノ地點ニハ我黨兵又ハ之ニ準スル者ヲ配置シ居留邦人特ニ朝鮮人ノ保護ニ任セシム

(2) 滿蒙統一政權ノ保有スル軍隊ハ政權保持ニ必要ナル兵力ニ留メシメ其基幹トシテ帝國在郷軍人ヲ採用セシム

(3) 各政權ノ軍隊練成ノ爲顧問、教官ヲ招聘セシム

五 外敵ニ對シテハ帝國ハ新政權ト共同負責シ又滿洲ニ於ケル交通通信ハ關東軍ノ統制下ニ在リテ主トシテ滿鐵ヲシテ之ヲ管理セシム

帝國ハ之カ爲メ滿洲ニ約三師團ノ陸軍兵力ヲ常駐セシムルヲ要シ常時滿鐵、吉長、吉敦、吉會、洮昂及四洮各鐵道ノ警備ニ任セシム

但滿鐵ヲ除ク右諸鐵道ハ要スレハ支那護路軍ヲ以テ警備ヲ補助セシム

六 滿洲ニ現存スル支那軍隊及馬賊ニシテ優良ナルモノハ改編シテ之ヲ國

(省) 防軍、保甲團及護路軍トナスモ爾餘ノモノハ之ヲ各省ノ産業方面

ニ充用シ又ハ掃蕩乃至懷柔ヲ企圖ス

七 滿蒙統一政權ニ最高顧問ヲ又各省政權ニハ該顧問ノ統制ニ依ル顧問ヲ

置ク又各政權ノ役人ニハ其要所ニ本邦人ヲ配ス

右諸顧問ノ要員ハ速ニ選任シ逐次之ヲ充當スルヲ要ス

八 滿蒙中央銀行ヲ設置セシムル爲帝國ハ所要ノ援助ヲ與フ

九 現在滿鐵沿線以外ノ地域ニ占據セル帝國軍ノ撤退ハ各省政權確立シ前進

四ノ(4)項ノ實現ヲ見ルニ非ザレハ之ヲ行ハス

七 帝國ハ滿蒙ニ於ケル我殖民及企業ノ發達ヲ圖ル爲速ニ計畫及補助ノ機關

ヲ構成スルト共ニ關稅ニ關スル內滿關係ヲ規整ス

附言

滿蒙ニ於ケル帝國ノ行政施設上ノ組織ニ對シテハ相當ノ革新ヲ企

圖ス

ニ北滿ニ對スル對策

元來南滿ハ礦物資源ニ富メルモ農業的發展ニ至リテハ大ナル期待ヲ之ニ繫

クヲ許サス帝國ガ其人口問題一就中鮮人問題一及食糧問題ヲ解決セント欲

セハ勢ヒ北滿ニ帝國ノ政治的勢力ヲ扶殖シテ北滿ノ開發ニ當ルト共ニ吉會

鐵道並東支鐵道橫過鐵道ヲ完成シテ之等資源ノ吸收ニ力メ仍テ以テ北滿

物資ノ東支線ニ依ル東流ヲ妨ケ蘇國極東政策ノ一端ヲ瓦解セシムルヲ必要トス

之カ爲速ニ學良系ノ殘存勢力ヲ根絶スルト共ニ親日政權ノ地歩ヲ確實ニシ以テ帝國勢力扶植ノ基礎ヲ築クト同時ニ撤兵ノ機會ヲ作爲スルヲ必要トシ左ノ對策ヲ採ル

一 黑龍江新政權樹立ノ方式ハ前掲滿蒙新政權確立ニ關スル措置ニ準シテ之ヲ行フ

一 黑龍江省ヲ扼シ學良系復ノ再生ヲ備ヘンカ爲ニハ齊々哈爾ヨリハ絶對的ニ過早ナル撤兵ヲ行フヲ得ス

但在郷軍人ヲ以テ治安維持隊ノ編成ニ着手シ其完成ヲ速ナラシム

一 蘇國ニ對シテハ嚴ニ其行動ヲ監視シ彼レノ越境出兵ヲ見サル限り暫ラク日蘇關係ノ激化ヲ避ク

一 哈爾濱ハ兵カヲ以テ之ヲ占據スルノ要カシ

一 學良系敗殘部隊ニ對シテハ主トシテ省防軍ヲ使用シ要スレハ帝國軍ノ一部兵力ヲ以テ之ヲ援助シテ之カ濲滅ヲ圖ルモ窮極ニ於テハ之カ懷柔ヲ必要トス

一 東支鐵道ニ關スル權益ハ將來樹立セラルヘキ滿蒙政權ヲシテ之ヲ繼承セ

390

シムルト共ニ逐次蘇國權益ノ減退ヲ策ス

三 錦州政權ニ對スル對策

滿州事變ノ解決ハ張學良政權少クモ錦州附近ノ彼レノ勢力ヲ覆滅スルニア
ラサル限り其目的達成ヲ迅速ニ期待スルヲ得ス
之レカ爲メ左ノ對策ヲ講ス

一 錦州政權乃至張學良ト脈絡相通スル兵匪馬賊カ滿蒙ノ鐵道沿線治安攪亂
ノ事實ヲ内外ニ公表宣傳ス

二 事端ヲ避クル爲張學良軍ノ山海關以西撤退ヲ南京、學良及錦州政權ニ要
求シ肯カスンハ事態惡化ノ責ヲ支那側ニ負ハシム

三 錦州附近支那軍ノ買收其他ノ謀略ヲ行フト共ニ新民西南方遼河々孟ニ軍
ヲ集中シ軍艦ヲ山海關方面ニ廻航シ朝鮮旅團ノ歸鮮ヲ見合ス等ノ處置ヲ
爲シ以テ支那ヲ威壓ス

四 右ノ如キ各種ノ手段其功ヲ奏セス敵ノ脅威益々加ハルニ於テハ軍ハ太凌
河附近ニ於テ張軍ト相對峙シ爾後好機ヲ捉ヘテ敵ヲ迎撃ス

右ノ場合ニ於ケル滿蒙及北支那ノ事態急變ニ應スル爲時機ヲ失セス臨時
編制(應急動員)ノ一師團ヲ滿州ニ混成一旅團ヲ支那駐屯軍ニ増派ス
但 其時機ニ就テハ別ニ審議決定ス

0867

支那中ニ對スル對策

其一 對北支那方策

北支軍閥ヲ操縦スル謀略ニ依リ張學良政權ノ覆滅ヲ策ス之レカ爲有力ナル
一 特務機關ヲ北支ノ要地ニ派遣シ同方面ニ於ケル各機關ヲ統轄セシム

其二 對中支那方策

南京政府ニ對シ再ヒ排日排日貨ノ根絶ヲ要求シ之カ實行ヲ見サルニ於テハ
帝國ハ有效適切ナル手段ヲ執ル然レ共此間該方面ニ於ケル我居留民ハ著シ
ク困難ニ陷ルヘキヲ以テ政府ハ之カ救済ノ途ヲ購ルルヲ要ス